

研究余録

島原の乱の戦後

復興について

長谷川成一

一

従来、島原の乱に関する史料は数多く発見されてその研究も進んでいる。しかし、乱後の島原地方の復興について研究されたものは、あまり見当たらないのが実情である。この小文では、乱後の復興がどのように行われたかを長州藩との関りあいを通じて考えてみたい。

二

周知のごとく、島原の乱は寛永十四年に勃発し、数カ月間反乱軍が幕軍を原城に釘付けにして戦い、翌年二月に全滅した。この戦いで島原領では二万三千人、天草においては一万四千人が死亡したといわれる。つまり、四万に近い農民が消失したことになり農村の荒

廃は想像以上のものであったであろう。それ故、幕府はこの事態に對し早急に手をうたなければならなかったのである。『島原半島史』によれば、「幕府は同四月十三日浜松城主高力忠房を島原城に徙し、(中略)戦後の経営に当らしめると共に、九州の諸藩に令し、又は幕府直轄の地から移民を両地に送らしめて、荒廢に歸した農地の復興に努めた」とあり、移民による人口増加をはかって復興の端緒としたようである。しかし、移民の中には長州藩からの者達も存在したのであつて、必ずしも『島原半島史』の言うように九州諸藩・幕府直轄領からのそれだけでないことは明らかである。

長州からの移民については、毛利秀就が出した寛永十九年十二月二十日付の高力撰津守宛ての手紙の中に、

当秋御老中より御奉書にて嶋原天草百姓無之付而、(中略)拙者領分も右之両所へ百生差下可致御馳走之旨被仰下候、(中略)百生大分御馳走不罷成迷惑仕候。併御奉書にも跡不作無之様ニ申付候へとの儀候。然間百生三十人差下申候。

とある。紙面の都合上必要な部分だけをのせたが、大意は、近年は当方も作柄が悪く牛までが死に絶えてこまっている。しかし老中からの命令であるから、百姓三十人程は送りましょうというもののである。

これに對し、高力撰津守忠房は正月二十九日付の次のような手紙を秀就に送っている。

大分之御百姓、銀子迄差添被為越候通、具承届候、比段一ッ書を以御老中へ可申上候ニ而可御心易候。(以下略)

と、忠房がこれらの百姓達を受けとった由を述べている。また、毛利ではこれらの百姓達が移民する際銀子を与えたようで、忠房は毛

利氏の忠勤の次第を老中に報告するから安心するようには言っている。

それでは、これらの移民の実態は如何様のものであったのであろうか。この間の事情については、寛永十九年十二月二十五日の「付立」に詳しく説明されている。それによれば、単に百姓とここで書かれている者は、「頭百姓」と言われる者のことであって、彼地へ送られたのは彼らの妻子を合わせて百七十八名である(男九十四名、女八十四名)。また、銀子を持たせてやった由が忠房の書面にみえるが、藩当局は頭百姓一人当り合力銀と称して五百匁ずつを配付している。合力銀の外に、牛・馬を買い農具をそろえるために、頭一人に付き百五十匁ずつを与えている。このように銀子を与えて百姓達の彼地における生活の安定をはかる一方、欠落の防止も行なっている。つまり、これらの百姓の親類が居住する村の庄屋に対し、彼らから受状(請状)と称するものを取ることを厳命している。藩当局は経済的援助を与えると同時に、欠落防止のため血縁的連帯責任も負わせて移民の完遂をねらっているのである。

以上のような準備の後、防長両国の百姓とその家族は天草・島原に送られたのである。これらの移民の次第は、藩主秀就が十二月二十五日付(寛永十九年)の手紙でもって、松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋・阿部対馬守重次に報告している。それに対し幕府からは二月五日付(寛永二十年)の返事が来ており、その中に、

従其国天草嶋原へ百姓男女等就被差越之入念候。書面之趣具達上聞候処、御機嫌ニ被思召候、委曲從留守居可申達候。

と、移民の行われたことを將軍も確認した由が記されている。十二月二十五日付の手紙の返事が翌年の二月に入ってから出されている

のをみると、恐らく前述した高力忠房がこれらの次第を幕閣に報告した後、秀就に対して確認した由が知らされたのであろう。即ち、これらの移民策は幕閣の指導の下に毛利氏と高力氏との間で行われ、乱には直接関係の無い農民達が天草・島原地方に移送されて戦争で荒廃した農村復興の一端を担わされたのである。

(付記) 引用している史料は全て山口県文書館所蔵のものである。史料の筆写を快諾して下さった史料編纂所の諸先生には記して謝意を表したい。

(東京大学大学院人文科学研究科修士課程)